自然保育推進事業　活動報告書

１　**団体名**　広島大学附属幼稚園

２　**今年度の活動概要**

⑴環境構成に関すること

東広島市の中央に位置する本園は,園舎の裏に「たんけんの森」（陣が平山）があり，そこで子どもたちは自然を活かした遊具で遊んだり，森の中を探検したりしながら日々遊びを展開しています。森にはいろいろな生き物たちが住んでいますので，危険な生き物たちと危険でない生き物たちと出会うことがあります。本園ではヘビやハチなどの危険な生き物たちと出会うことがないようにするための対策を講じるのではなく，様々な生きものたちと出会えるように，あえて雑木林や草むらを残すようにしています。また，烏骨鶏やウサギなどの飼育動物とかかわったり世話をしたりすることができるように飼育小屋も設置しています。このことを通して，生まれたばかりの烏骨鶏のヒヨコにかかわってかわいがり，みんなで名前を考える場を設けることがあります。生き物たちとのかかわりを通して，こうした楽しみがある一方で，生き物の死を迎え，悲しさや寂しさを実感することもあります。楽しいことばかりでなく，生き物たちとの死と向き合うことも大事な体験であると私たちは考えます。

⑵特に印象的だった遊びの事例に関すること

①危険な生き物とのかかわりを通じて

４歳児 **９月**	**ハチの生態を身近で感じる** 	子どもたちの遊び場の地面に，ジカバチが巣を作っていた。保育者は「ハチ」と聞いて，遊び場から遠ざけなければいけないと思っていたが，森の達人が「ジカバチは乱暴ではないし，生き物を巣に運ぶから，それが見られたら面白いですよ」と言う。そこでハチの巣を過って壊さないように囲いを作り，ハチと人間が共存できるようにした。その環境を整えたことで，子どもたちはハチが巣に入ったり飛んで行ったりする場面を面白そうに眺めることができた。 ハチの巣があると，すぐに子どもたちの遊び場から遠ざけようとしがちである。しかしハチの種類によっては，安全なところから観察すると面白い生態が発見でき

		るかもしれない。子どもたちも，ハチに刺される心配がない中で，ハチが食べ物をもって飛んだり巣を出入りしたりする様子を見ることにより，ハチの生態の面白さを感じ，ハチも大切な仲間であると感じただろうと思われる。

②生き物の死を通じて

５歳児 ９月	愛着をもって育てていた動物の死を知る 	子どもたちが名前をつけ，愛着をもって育てていた烏骨鶏のヒヨコが夏休み中に死んだ。夏休み中の出来事であったため，死んでいた時の状況を詳しく伝えると，子どもたちから「かわいそう・・・」「とぴぃちゃん（名前）・・・」などといった悲しみの声が聞こえてくる。飼育小屋をみんなで見ていると，A女が寂しそうに「本当におらん・・・　どっかに埋めてあげたん？」と保育者に尋ねる。埋めた場所を伝えると子どもたちがその場所に移動し，穴が掘られた後を悲しそうにじっと見たり，目を閉じて手を合わせたりしている。中には「お供えしてあげよう」とつぶやくように言い，カップに花を生け始める。 A女が「本当におらん・・・」と言っているように，子どもたちはヒヨコの死を実感したのだと思われる。愛着をもって育てていた動物が突然死んでしまうのは，とても悲しい出来事である。しかし死んでしまったことを子どもたちが事実として受け止められるようにすることで動物も人間もいつかは命を終え，元には戻らないということに気付くきっかけにつながると考える。

⑶ その他，自然体験活動の充実に向けて取り組んだこと

環境整備作業

本園では，保護者の方々の力をお借りして環境整備作業を年３回（８月・10 月・２月）行っています。昨年度は豪雨災害もあり，年長組の森の遊び場となる拠点の移転を余儀なくされました。そこで，10 月は新たな拠点となる森の広場を作るため，風通しや陽が当たるよう木々を伐採してくださいました。また，２月には薪小屋２棟を製作してくださいま

した。本園は子どもたちが年中，焚き火を楽しんでいることもあり，薪小屋は必須になります。土曜日で普段はお休みにもかかわらず，保護者の方々は“子どもたちのために”という思いで一生懸命作業に取り組んでおられました。1 月から年長組の子どもたちが新たな広場でいきいきと遊んでいます。

【年長組の新たな拠点作り】

【薪小屋づくり】